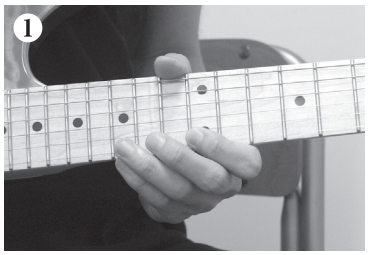
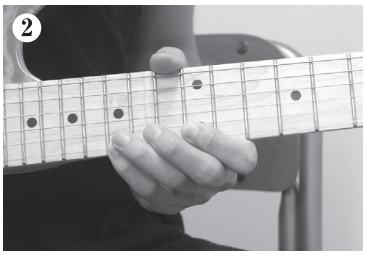
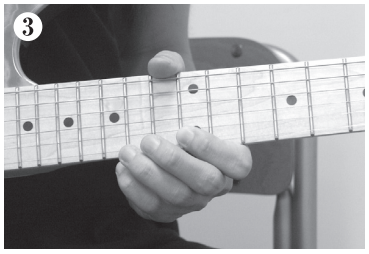
注意点1 左手

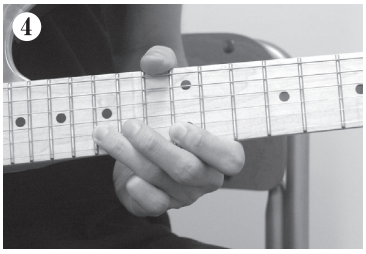
ピッキングと同じぐらいの音圧と音量を目指そう

ここでは、基礎中の基礎ではあるが、ハンマリングとプリングのやり方について確認しよう。ハンマリング&プリングのくり返しフレーズでは、ただ押弦して、離弦してしまう動作になりがちだ。しかしこれではハッキリとした音が出せない。そこで特にプリングは、しっかりと弦を引っ掛けるように心がけよう。1小節目1拍目を例に解説するが、1弦をしっかりと引っ掛けるようにプリングすることが大切だ（**写真③**）。最終的にピッキングと同じぐらいの音圧と音量のあるハンマリング&プリングができるようになれば良いだろう。ちなみに2弦15フレットを薬指で押さえる時、1弦12フレットを押さえる人差指の位置をそのままにすると良い。そうすることで、スピーディなポジショニングができるようになる。


人差指の指先で2弦に軽く触れてミュートすると良い。


小指でのハンマリング。指先をしっかりと弦に叩きつける。

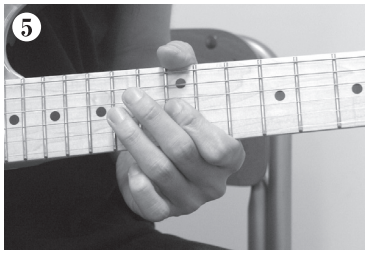

小指を1弦の下方向に引っ掛けるようにプリングする。

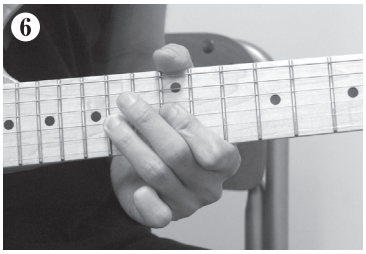

最後は2弦15フレットを薬指で押弦する。

注意点2 左手

ハンマリング&プリング時の余弦ミュートを覚えよう

1弦から6弦に向かってハンマリング&プリングでペンタを弾くこのフレーズでは、前半は小指と薬指の入れ替わり、後半は薬指による移動を意識して練習しよう。ただし、これまでも何度か解説してきたが、指を素早く動かすだけではなく、余弦のミュートについても考えながら弾いてほしい。3小節目2拍目では、人差指は3弦12フレットを押さえるだけでなく、4&2弦のミュートもしよう（**写真⑤**）。こうすることで、誤って薬指が3弦以外に触れてしまってもミス・トーンは出ない（**写真⑥**）。3弦14フレットをプリングする際に、3弦と2弦の間ぐらいで指を止めるイメージで行なえば、さらにミス・トーンを防ぐことができるだろう(**写真⑦**)。


人差指は押弦と同時に隣接弦のミュートも行なう。


ハンマリングすると同時に、次のプリングのことも意識する。

3&2弦の間を目指してプリングしよう。

4弦14fを薬指で押弦。次の人差指の押弦準備も忘れずに。

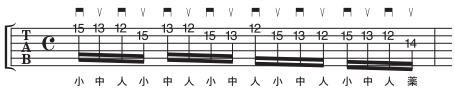
～コラム22～

地獄の戯れ言

70～80年代前半までの速弾きと言えば、16分音符主体のフレーズであった。そのためオルタネイトが絶対条件で、速いフレーズではインサイド・ピッキングの練習を多くした（**譜例1-a**）。ところが、80年代後半にイングヴェイやポール・ギルバートが登場すると、能率を重視した弾き方が一気に浸透。アウトサイド・ピッキングのアップ主体に弾く6連フレーズや、エコノミー・ピッキングが代表的となった（**譜例1-b**）。このように時代によって速弾きのスタイルは変化している。筆者も時代に取り残されないように練習方法を変え続けているが、読者のみんなも常に研究し続けることを忘れないでほしい。

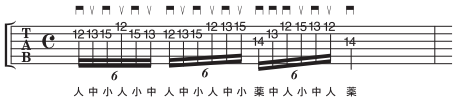
時代で変わる速弾きスタイル

譜例1-a　70～80年代前半までの速弾き



インサイド・ピッキングが多く、16分音符主体。

譜例1-b　80年代後半以降の速弾き



アウトサイド・ピッキングが多く、6連符主体。